OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山口玄洞のことどもと公共奉仕
Author(s)	宮本, 又次
Citation	大阪大学史紀要. 1982, 2, p. 5-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山口玄洞のことどもと公共奉仕

宮本又次

一　山口玄洞の生いたち

山口玄洞は文久三年十月十日に生れた。玄洞は尾道の久保町に住んでいた山口寿安を父とし、三原藩の近藤家から嫁いで来た節女を母として、その長子として生れ、幼名を謙一郎といった。

山口家の祖先は九州島原北目多比良村の温泉神社の社家で、植木姓を名乗っていたが、社家の三代目が分家したのが、植木甚左衛門信直で、寛文七年五月八十歳で没し、その六代目の順的義政は弟の光信に家をつがせた。順的は島原の屋敷内にまつってあった稲荷神社の位をうけるために京都の伏見稲荷に参詣しようとして、その途中で船が難船し、尾道に土着することになる。そのためそこで医業を開き、山口姓を名乗る。土居町にて代々医業を行うかたわら醤油をも商なう。その三代目寿安義則は久保町に移る。寿安は医は仁術なることを心がけ、信仰心も厚く、しばしば貧者をたすけた。

その長子謙一郎も温和なたちで、両親もいたく可愛がり、仏道の有難いことを教えていた。しかし何分にも尾道が船着場で教育的環境としてはよくなかったので、謙一郎の九歳のとき、父は海をへだてた伊予の厳城島の漢学塾におくって学ばせた。父は仁医であったので、家計も豊かでなく、学資も充分に送れないため、愛児のために好物の酒をやめたほどであった。また機会あるごとに書翰をかきおくった。のちまで玄洞はその手紙を大切に保管し、二巻の巻物として永く山口家に秘蔵した。「要用書」はその一つで拙編『山口玄八十年史』にその全文を写真で入れておいた。礼節上のこと、衛生上のこと、思想上のことまで、微に入り、細に入ってかいている。「朝夕神様を御拝み可被成候事」と信仰心をうえつけている。

謙一郎は内海の離れ島にて浪の音に故郷をしのびつつ勉学していた。十五歳（明治十年）のある日父長逝の報をうける。父は四十五歳であった。謙一郎は早速退塾して帰り、遺産とてもないので、一時荒物を荷車につんで行商などをしつつ、母と四人の弟妹の面倒を見ていた。明治十一年母の許しを得て、大阪本町四丁目の心斎橋筋東入るの土居善という洋反物店に丁稚奉公することとなり、清助と呼ばれる身になる。

明治十四年十八歳の春を迎えた清助は店主の信頼をうけ、得意先の

気受けもよかったが、土居善助は綿ネルのブローカーを主とする洋反物屋であって、土居善の営業状態は必ずしも良好ではなかった。十九歳の時不幸にも閉店する羽目となる。その翌日まさに閉店するという時に、清助をいたく信頼していた鳥取の客人が千円を預けて品物を調達するように依頼して京都に旅立った。あたかも清助は閉店と知って、ただちに客をおって京都に赴き、その金を返した所、客人は非常によろこび清助の将来について心ぞえをしてくれる。土居善を去った清助は数人のものと共に鳥取商人の宿屋であった泉甚の二階十二畳の部屋に合宿して、一、二年間はこれまでの信用をもとにして、当時「トンビ」といわれた、いまのブローカー業を営んでいた。正直と勤勉とを忘れなかったので、はじめは鳥取の人達のくる旅人宿、商人宿をまわっていたが、早くも余力が出来るようになり、得意筋の声援もあったので、明治十五年には伏見町五丁目、横堀二丁目(筋違橋東詰の角)の地に、間口一間半という小さい店舗を出し、洋反物商山口商店を開業した。

二　洋反物商の開店

開業時の備品として一円二〇銭の帳箪笥一本と算盤と長帳の三点がいまものこっている。帳簿は明治十六年からのものがあり、当時の状況を窺える。拙稿『山口玄八十年史』中にその帳簿をもって営業状態を分析しておいた。当時洋反物商(唐物屋)の取扱い商品は全部輸入品であって、すべて外国商館の手を経て輸入されていた。洋反物は問屋・仲買小売商の手をへて、一般需要者にうられた。問屋は引取屋ともいい、外国商館から買いとった商品を輸入箱のまま卸売りをなし、仲買は「店屋」と称し、問屋より供給をうけ、一反づつ各地方の顧客に販売した。小売屋は切売りを専門としていた。清助は地方の顧客の注文をうけて問屋から当該商品をかい、その客に売りわたしたのであるから、仲買人に属した。

開業そうそうの時は、さきに一千円を返却したので、感謝された鳥取の顧客が第一の得意先で、その縁故によって鳥取の客が多かったが、地方商人としては外国商館から直接に仕入れるよりも、こうした清助のようなものの手を介して、取引する方が格安であったので、次第に店も繁昌するようになった。

そこでやっと前途の望みも出来たので、国元から母と弟の随三郎、妹の三人を引取り、店員も二―三名おいて、家業に精を出した。清助は信用第一主義で、昼間には注文を引受けて、依頼品を整理し、夜間にはそれらを荷造りして、全く不眠不休で頑張った。かくて独立十年で相当の資本をかち得た。この頃「舶来」がすなわち「上等品」と世人は考えていて、舶来品に対する信仰が強かったので、商品を安くさえ仕込めば必ず儲かったし、洋反物商は大阪ではハイカラな職業と考えられていた。

輸入品は横浜・神戸の外国商館に頼っていたので、当時の引取屋も洋反物商も力弱く、直輸入をこころみるものもないではなかったが、その勢力は外国商館には遠く及ばなかった。そのため外国商館は勝手気儘な行為をなしたので、洋反物屋もついに黙しきれず、外国商館の

暴戻不遜に対し、団結の威力をもって抗争することとした。その一つのあらわれとして大阪における指折りの洋反物商が十軒ばかり集って組合をつくり、モスリン・トラストとした。しかし残念なことに山口商店にはまだこれに加盟するだけの資格がなく、それからとりのこされてしまった。このため商品の仕入にも、販売にも多大の不便があった。こんなとき幸いにも、このモスリン・トラストと不調和になっていた神戸のイリス商館が、山口商店に好意をもって特別提供をしてくれたために、かえって自由に仕入れが出来、営業は一段と発展した。

明石喜代治や新宅の妹婿山口嘉蔵も一心一体となって奮闘し、店も手狭となり、二十五年には淡路町五丁目にかなりの店舗を借受け、店員十三名、女中二人をおく。このころ京都市錦小路東洞院東入ルの岩室五郎兵衛の長女政子を迎えて結婚した。結婚の届出では明治二十六年二月六日になっていた。

日清戦争で毛布・服地・金巾（カネキン）・モスリンの広幅物の洋反物はまた軍需品だったので、買上げられ、山口商店は順風に帆をあげる。明治二十九年三十四歳で、山口家四代として家名をつぐこととし、玄洞を襲名した。

明治三十一年三十六歳のとき、本町三丁目二十四番地に土地を求めて、店舗を新築する。三十四年五月には二十四年ぶりではじめて尾道に立ちより、先祖の墓にまいり、尾道市役所を訪ねて同市の女子高等小学校に一万円を寄付する。この日の出の山口商店の蔭には支配人豊田利平がおり、備中玉島の出身、よく店員の訓育につとめたが、三十七歳で早死したのには玄洞の落胆が大であった。

玄洞は三十七年には多額納税者となり、九月その互選によって貴族院議員にも当選したが、三十九年九月満二カ年で辞任している。このころ三十四銀行取締役、大阪織物同業組合初代組長、共同火災監査役などに就任し、その後も泉尾土地会社、尼崎紡績、毛斯倫（モスリン）紡績、大日本紡績、大阪商事などの重役としても手腕を振った。

三　日露戦争後の発展と自家加工

更紗・金巾の製織は大阪紡績・天満織物・金巾製織らにおいて着手され、迅速なのびを示した。要するに舶来織物及びその模造品は、外国品あるいはその類似品に対する盲目的迎合ということもあったろうが、また世人の一般的な嗜好に投ずることもあった。明治三十四、五年頃からこの種の商品の供給は内地需要に対してすら不足を来し、日露戦争後には商権の伸展に伴い、海外輸出方面にも新機軸を現出するに至った。綿紡・毛紡が台頭すると染色業もこれに附随して生れた。そして明治の末年には輸入品を制圧するまでになった。しかも染色（柄及び無地染一切）の権限は洋反物商（輸入端物卸商）がもっていて、また綿毛共に、生地の買付をなして染工場（染色業及び捺染業者）へ委託加工の指令を出して、加工販売をなしたのであった。そしておいおい海外にも輸出しようとした。こんな情勢の下で、勢い自家独特の商品（柄・無地）が物をいう時代になって来たので、玄洞も常に他店よりもよい染めにつとめ、丈尺なども定尺より余裕をもたすことをきびしく唱えて実行した。

また日清戦後は大阪の川口の中国人居留地から雑綿を買いつけていたが、日露戦争後にはとくに中国貿易に注目し、店の明石佐太郎を担任者として川口への商売にのり出した。そのころ中国本土では永年舶来品を使用して来た関係もあって、わが国の加工綿布の国産品はいくらすすめても見向きもしなかった。ただ雑綿布、泉州のや尾州の格子織は値安であったので、買注文があり、和歌山の形染綿布などに注文があるばかりであった。しかし玄洞は辛抱づよく取引をつづけ、これがのちに山口商店が第一次世界大戦当時本格的に海外輸出開拓への下地となった。

四　玄洞の備後町進出と引退

玄洞の社会的地位の向上とともに、山口商店も膨脹し、店舗も狭隘となったので、大正元年十二月に現在の備後町四丁目の角地に大店舗を新築して移ることになる。

備後町店の一階の内部は店主の坐る位置から全部見わたせるようになっていて、玄洞の指揮はすみずみまでに及んだ。このときはすでに百数十名の店員があり、業務一切はこれらの人々によって充分果たされたが、玄洞は依然として店務を総括して、朝早くから起床して水風呂をあびて、五体を清め、神仏に祈って商務を見た。

玄洞の多忙は余人の想像をゆるさぬものであった。土地や家屋の買入れも相当に多かった。玄洞は先頭に立って商売につとめ、必要な睡眠さえもとれず、時々不眠症にもなり、ついに大正六年に京都河原町広小路の本邸に引退することを決意し、大阪の店は株式会社組織に変更し、多年薫陶した上級店員に一任することにした。

五　玄洞の精神と経営方針

玄洞ははじめ株式会社山口商店を資本金五十万円をもって発足させる積りであったが、総会直前にいっきょに倍額の百万円で発足させている。

玄洞の実業人としての活躍は五十六歳で一応終ったが、その実業生活で貫ぬいて来た精神は誠実と堅実による信用であった。またもって生れた商才に運も働いていた。

玄洞の場合日清・日露の戦争が山口商店を飛躍的に発展させるもとになっているが、玄洞は「物事は思うようになっただけでは成功はむつかしい。思いがけぬことがなくては、成功したり、金がたまるものではない。これには機会というものがあって、常に一歩先を心がけて、その機会をとらえる必要がある。凶事もまた然りで、思いもかけぬ災難が起こって大失敗するのである。あらかじめこれに備える心がけが肝要である」と言っている。彼にあっては誠実・信用と商才とは矛盾していなかった。しかもその商才は投機的なものではなかった。玄洞は引退するまで全部現金取引で、一度も手形を発行したことがなかったというのもその一面であった。

営業上ではことに得意先については差別をつけてはいかぬといい、たとえ小家の取引先といっても決して粗略にしてはいかぬ。むしろ優

遇すべきだといって訓戒を与えていた。それは従業員に対しても同様であって、小店員といって軽んぜず、平等に目をかけていた。

このような玄洞の活動の蔭には政子夫人の内助の功も大であった。政子夫人は明治二十五年二十三歳で嫁して以来、ただに家計の切りもりをするだけではなく、多数の住みこみ店員の世話、女中や別家の夫人たちの教育・親睦はおろか、晩年には玄洞が面倒をみた寺院の経営の世話までなし、賢夫人の聞えが高かった。

六　晩年の玄洞の信仰生活

玄洞は大正六年の引退後は信仰生活に入り、事業には直接関係することなく、時折り山口商店の運営に助言を与える程度であった。

引退後玄洞は下鴨あたりを散歩し、ときには上賀茂にも足をのばしたが、ある日百万遍で福住周学師を知り、同師を同行として称名念仏をはじめ、ついに念仏の三昧境に入る。この初発心の地百万遍境内に修道院を建立した。大正九年ごろには近江坂本の奥、飯室谷の長寿院にたてこもって念仏の浄行に親しみ、その隣地に松禅院の復興をなす。

一方、京都紫野の大徳寺で、専門道場の師家昭陰和尚に帰依して、大いに禅門の宗風に憧憬し始める。また大本山方広寺派の管長間宮英宗和尚を知ってからは、禅的陶酔を感じ、念仏と禅とを併修し、いわゆる昼誦坐禅の猛行を行った。そして玄洞は間宮和尚に酬ゆる気持から、遠州奥山方広禅寺に三重塔を建立して「如法写経会」を設立し、京都に山口仏教会館を建てた、巨額の基金を添えて、和尚を館長に迎えた。

「如法経」とは如法に法華経をかき写すという意味であって、「如法経会」とは、厳粛にして敬虔な法華経書写の法儀をさし、如法塔または如法堂とは書写した法華経を奉納する堂塔の名称である。

玄洞は横川の如法堂趾が雑草のしげるままにまかせられていることを知って、写経会の復興と如法堂の再建を発願した。大正十一年七月八日より十四日まで復興第一回の如法経会を願主となって厳修した。慈覚大師の定めた作法によって法華経十巻を浄写した。

さらに大正十五年には坂本の西教寺で、別時大念仏会を設け、昭和四年には古知谷の阿弥陀寺で毎夏一週間にわたる光明念仏修養会を催し、一会に二二〇人の結衆を得ている。

その他玄洞の建立した堂塔は枚挙にいとまもない程であるが、就中醍醐大伝法院大講堂と神護寺金堂と延暦寺阿弥陀堂の三つはなんといってももっとも努力をはらった大作である。

醍醐寺では中心建造物たる大講堂の外、弁天堂・不動堂・鐘楼・阿闍梨寮・総門・学寮・地蔵堂・伝法学院本館など実に九棟に及ぶ。ここで昭和五年四月醍醐天皇一千年御忌大法要が行われた。

神護寺には毘沙門堂・五大堂・大師堂があり、五大堂の右手に数十段の石段をふまえて朱色の金堂がそびえている。

比叡山延暦寺阿弥陀堂は大講堂趾のうえ、法華

山口玄洞

総持院の旧趾にあたり、山地を削ってたてられたもの。この堂は比叡山開創千百五十年を迎えるにあたり、昭和十年に玄洞が寄贈したものである。

玄洞は大衆を教化するには、景勝地に伽藍を整えて境地説法すべきである。整備された美しい伽藍があって、帰目がついている聖地を訪れるとき、如何なる悪人といえども、粛然として襟を正すであろうとし、境地説法は説教者の百万語にも勝ると考えたのである。

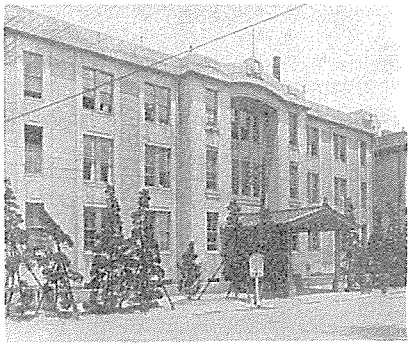
たびたびの伽藍寄進の評判がたったとき、伝手をもって四方八方から嘆願が殺到した。しかし玄洞は寄進するには、その寺の由緒正しいこと、景勝の地にあること、住職の人品がすぐれていることの三カ条を原則として守った。このような条件を具えている寺々には自分から願い出てでも建立した。嘆願があれば何処でも建てるというような安易なものではなかった。しかし気が進めば、決河の勢いで建築にとりかかった。実業界にあったときの決断即行と同じであったという。

この頃玄洞は毎朝三時に起床、結衆はもとより小店員や下男まで本堂に列座させて声高らかに称名した。玄洞はこの念仏修養にこそ真の人格をつくるものありと確信していた。昭和二年ごろから毎年の山口商店の新入社員を、自分が寄進再興した坂本の安養院と本邸に半数ずつ、交替にて寄寓させた。

日日念仏修行のかたわら、炊事や掃除もさせ、丁稚学をもたたきこみ、この試練にたえたものを山口商店の店員として大阪に送りこみ、入店させた。

ともかくも念仏の大道を宇内に宣揚しようとするのが玄洞の本願であった。

教化にはまず自分の周囲よりと主張し、実行し、法講話もつづけた。昭和四年十二月大阪の店にて遺訓をなした。その全文は拙編『山口玄洞十年史』におさめておいた。この遺誡をのこしてから満七カ年を経て、昭和十二年一月九日午後六時玄洞は本邸の三階にて大往生を遂げた。糖尿病と腎臓病の併発による。この年の元旦病床にて、年賀に参集した別家や上級店員に、「社員は自己本位ではいかぬ。自己を捨てることが自己の向上・成功の基である。薄利は商人の秘決で、投機的商売と仲介人相手の商売をあくまで避けよ」とさとし、なお「重役や幹部のものはよく三百の店員とその家族の前途を見てやれ」と訓誡している。



山口厚生病院（のち阪大医学部山口病館となったが，病院改築のとき取壊した）

七　玄洞の寄付行為と社会奉仕

玄洞はその奮闘努力によって築きあげた財産の多くを公共事業や慈善事業に投じた。晩年にはとくに寺社に寄進した。

玄洞はしばしば親の恩、人々のおかげ、国の恩を説いた。自分の成功はおのれの努力もさることながら、いかに社会の恩恵によるところが大きいかを折にふれて感じていた。玄洞がかなり早い時期から公共

のため諸方面に寄付するようになったのもそのあらわれであった。

大正・昭和における寄付金王といわれ、その生涯は「捨てるためにもうけた人であった」。その初期には学校への寄付が多かった。明治三十四年五月、二十数年ぶりに帰郷したとき尾道の女子高等小学校に一万円を寄付したのを手はじめに、明治年間には大阪船場小学校、早稲田大学・大谷派女子学校・日本女子大学など四件の寄付を行った。また大正年間には早稲田大学・慶応義塾、尾道市実業補習学校（設立および経営基金）二回、京都大学山口奨学資金への五件がある。昭和になると京都府立第一高等女学校、大津市膳所小学校へ二回、京都府立第一中学校、大阪大学微生物病研究所二回、京都家政高等女学校への七件の育英事業寄付を行っている。

病院への寄付や低所得のため治療を充分に受けられない人々のため病院の設立など医療方面への貢献も大きい。父の寿安が仁医で、貧乏な人から医療費をとらぬ方針であり、おさな心にこの方面への関心が強かったのである。

明治四十一年日本赤十字社、四十四年には恩賜財団済生会へ寄付し、大正七年には財団法人山口厚生病院の設立資金に百万円を醵出している。さらに大正十三年には広島県片山病撲滅組合及び京都岩倉病院へ、十五年には再度済生会へそれぞれ寄付をしている。大正十一年には尾道の市民多年の願望であった上水道敷設にさいし、その工費三万五千円を寄付した。この外大正七年の米騒動のとき大阪市および京都市へ二万五千円を寄付し、関東大震災、奥丹後震災などにも義捐金をよせている。昭和九年には北海道函館火災の義捐もしている。尾道市の実業補習学校には大正八年設置及び経営基金を出し、尾道商業実務学校となったときにも寄付しており、のち同校は尾道市立明徳商業学校となる（のち市立南高等学校）。

大阪でもいろいろ寄付してはいるが、特記すべきは山口厚生病院の設立である。

大正七年六月、財団法人山口厚生病院の設立資金として百万円を醵出した。この内二十八万五千円は同病院の創業資金に、七十一万五千円は維持資金にあてられた。この病院の設立は治療費を支弁することの出来ない低所得の不幸な患者を救うために建てたものである。玄洞はこれらの人々が病院にはいりやすくするために玄関の造り方までも気をくばり、その入口が道路より高くならぬよう指図した。仁医であった父の志をついだものであろう。大正十一年十月落成、その管理を大阪医科大学に依頼した。のち大阪医大は大阪帝国大学医学部となり、政府に移管され、便宜上財団法人を解散し、昭和十年七月七日政府へ献納の手続をとり、大阪大学によって経営されることになった。この敷地内の一部に江戸時代中津藩の蔵屋敷があり、そこには福沢諭吉生誕のうぶゆの井戸もあった。いまはこわされて阪大附属病院敷地の一角になっている。

昭和四年大阪医科大学では学長楠本長三郎博士が中心となり、大阪地方が外来伝染病の門戸になっている事情にかんがみ、その対策として微生物病の総合研究をかね、防疫治療に関する特殊機関設立を主唱した。大日本紡績社長菊池恭三はその他有力者とはかり、その創設費の支出を山口厚生病院の設立者たる玄洞に依頼した。玄洞は二〇万円

を寄付した。玄洞と菊池は親交あり、このようになったのである。

昭和八年二月医学部付属病院の東隣に鉄筋コンクリート造五階建、延八五三坪の建築に着手し、翌九年九月に竣工したので付属の家具も備えつけ、これを大阪大学に寄付し、微生物病研究所とした。古武弥四郎が所長に就任し、細菌血清学部、防疫学部、寄生虫病学部が設置される。

これより先、佐多愛彦学長のとき、竹尾治右衛門の提供により成立した財団法人竹尾結核研究所は昭和八年に一応解散せられ、篤志家の寄付で出来ていた特殊皮膚病研究所とともに、微生物病研究所に合併された。

その後研究部門は次第に増設されて、真正細菌学部・ウイルス学部・細菌化学部・防疫学部・化学療法研究部・寄生虫原虫学部・感染病理学部・竹尾結核研究部・癩研究部・臨床研究部の十部となって発展したが、いまは阪大千里山キャンパスに移っている。まことに玄洞は大阪大学の一大恩人といってよい。

なお玄洞の末女、幾子の婿となった医学博士、理学博士山口左仲は勤務をもたず、寄生虫の研究に没頭していたが、その研究と生活を支えたのは政子夫人の援助によるものであった。玄洞には三人養子があり、一人は東大法学部、次は岡山大の寄生虫の教授、その一人は微研の教授であった、玄洞はそれらの婿の研究も金銭的に援助していた。

こうした善行にも玄洞は誇示せず、むしろひそかに行なう方であったからその外洩れているものも少なくない。『称禅院略伝』にも、拙稿『山口玄八十年史』にはあたう限り網羅的にはかいておいたから見てほしい。

終戦後山口商店は二十四年八月に株式会社山口玄に切りかわった。会長には養嗣子東京農業大学出身の山口三郎が襲名して山口玄洞となって就任した。二十六年山口玄洞が代表取締役として社長になってもおり、昭和二十年三月戦災にて本社は全焼したが焼けのこった倉庫内にて業を開始した。その後隆々事業は復興して昭和三十二年、三十三年に鉄筋ビルを相ついで完成した。

〔参考文献〕
『称禅院略伝』。宮本又次・安岡重明『山口玄八十年史』。宮本又次『大阪商人太平記』明治後期篇下。宮本又次『関西財界外史』戦前篇。『東区史』第五巻人物篇。宮本又次『キタ』。

（みやもと　またじ　大阪大学名誉教授）